



今号の「輝く学年団を訪ねて」の取材でお邪魔した、「山村留学」の受け入れ先でもある岩手県立葛巻高校は、北上山地の大自然に囲まれた高原に位置します。豊かな緑を生かして写真を撮るべく、カメラマンは、手で作った四角い枠を校内のあちこちでかざしては、鋭い眼光で風景を切り取り、撮影場所を吟味していました。

同コーナーや表紙の撮影では、約1時間をかけてロケーションハンティングをして撮影場所を決め、撮影する枚数は数百枚にも上ります。取材時にそう伝え、多くの先生は驚かれますが、決して冗談ではなく、その数百枚の中から、「その学校らしさ」「先生同士や生徒と先生との関係性」が最もよく表れた一葉をえりすぐるのです。取材で感じたかけがえのない空気感や、先生方の熱い思いを写真や文章に載せようと、スタッフ一同、目を磨き、筆を研ぐ日々です。(河野)



VIEWnext
高校版は

電子ブックで閲覧できます

『VIEW next』高校版、『VIEW21』高校版2020年4月号以降の記事は、電子ブックでご覧いただけます。ウェブサイト「VIEW next ONLINE」でご確認ください。
HOME → 学校教育情報誌『VIEW next』
→ 高校版バックナンバー

<https://view-next.benesse.jp/>

VIEWnext

高校版 2022年12月号

12月15日発刊

(予定)

『VIEW next』高校版は
年6回の発刊です

先生方からのご意見を
紹介します

Reader's VIEW

2022年8月号へのご意見

管理職と一教師が両輪で改革を

8月号の特集「新学習指導要領下の授業改善」の課題整理に示されていた4つのポイントを読み、管理職から進める改革と、一教師から進める改革が、両輪となって機能することが重要だと分かった。静岡県立静岡東高校が実践する「総合的な探究の時間」は、まさにその両輪が結実していると感じた。そして、同校だけでなく、ほかの2校の実践事例からも、学校改革を前進させる上で不可欠と言える、教師同士のリスペクトが垣間見え、改革を進める環境を粘り強くつくることの重要性を再認識した。

愛知県立大府高校 野々山 新

生徒が主語、それがこれからの改革の鍵

8月号の特集「新学習指導要領下の授業改善」の本特集テーマの next で、上智大学の奈須正裕教授が述べられていた教師の役割の変化は、私も授業改善で常に意識していることであり、若手教師にも意識するように伝えている。課題整理の冒頭にもあったが、「生徒を主語に」が、これからの改革の鍵であると再認識できた。そして、「指導変革の軌跡」で紹介された埼玉県・私立春日部共栄中学高校の実践は、まさに「生徒を主語に」した改革だった。定期考査の回数の削減や学期制・授業時間の変更などに対する校内の意見は、「教師が主語」で語られることが多いと感じている。今まであたり前に行われてきたことでも、「生徒を主語に」して見直せば、修正したり、廃止したりするべきものもあるだろう。同校の取り組みには、参考にすべき点が多くあった。

千葉県立銚子商業高校 田中 三郎

事故をひとつとしないため、対応の基本を再確認

度重なる園児バス置き去り事故などの多くが、事故が起こる前にいくつも事故を防ぐ機会があったであろうことを考えると、8月号の「学校危機管理 基礎講座」で紹介されたハインリッヒの法則の通りだと思う。しかし、学校現場では、事故がひとつと終わってしまうことが多いと感じる。ほかで起きた事故をいかに自分事のできるか、事故を未然に防ぐ点検項目を正確に実行できるか、1人が見落としても、ほかの誰かがカバーできるか、生徒に安全教育を徹底できるかなど、事故防止に向けての取り組むべき課題は山積みだ。同コーナーを読み、事故時の対応の基本を再確認しようと思った。

静岡県 匿名希望

今の時代だからこそ生まれる、新たな取り組みに注目

8月号の「マイ・ストーリーを語る生徒を育む進路指導」で、岩手県立福岡高校が実施していた、生徒間で大学入試対策の進捗を共有する方法について、なるほどと思った。今の大学入試の動向・形態だからこそ生まれた取り組みであり、ほかの生徒の入試対策の進捗が分かることで、自分の入試対策へのモチベーションが向上する点が、とても有効だと感じた。予測不可能な時代の中では、そのような新たな視点を得られる事例が次々に出てくると思うので、今後も注目していきたい。

福岡県・私立大牟田高校 荒木 信一